

平成20年度「専修学校を活用した再チャレンジ支援推進事業」成果報告書

事業名	若者の再チャレンジ支援プログラム		
法人名	学校法人最上広域コア学園		
学校名	新庄コンピュータ専門学校		
代表者	理事長 村上 國雄	担当者 連絡先	事務長 結城 和則

1. 事業の概要

若年中途退職者は、職を求めるに際して、自己の志望と現実の間で常に不安な心理状態に置かれている。こうした不安は、種々のスキルアップ講座の受講中においても浮上してくる。

本事業は、キャリアカウンセラー、臨床心理士、最上地域のIT企業、ハローワークとの連携の下に、ニートおよび若年早期離職者等の若者の不安を少しでも軽減するための心のケアを、カウンセリングを通じて行いながら、ITソフトウェア開発技能や知識を短期間で習得させ、これによって、主として新庄市、山形市、仙台市等の地元ないしは地元近隣地域のIT開発関連会社や人材派遣会社等への就職を促進することを目的として、ITソフトウェア技術者育成プログラムの開発と実施を行う。

2. 事業の評価に関する項目

目的・重点事項の達成状況

(1) 事業の目的

本校は、昨年度(平成19年度)、文部科学省より「ETロボットを活用したエンベデッドソフトウェア技術者育成プログラム開発事業(若者の再チャレンジ支援プログラム)の委託を受け、最上地域および近隣地域のニートおよび若年早期離職者等の若者を対象とした、短期間で、しかも楽しく習得可能なエンベデッドソフトウェア技術者養成プログラムを開発・実施し、当養成講座受講者の新庄市、仙台市および東京都のIT会社への就職を支援した。しかしながら、この昨年度事業は、きわめて大きな反省点を残した。第一に、受講者の不安な心理状態のケアに対応する体制が十分でなかったために、養成講座において落ち着いた心理状態で受講させることに難渋した。第二に、エンベデッドソフトウェア技術者養成講座受講者の定員20名に対し、実際の受講者は5名にすぎなかった。このような昨年度事業における大幅な定員割れの理由としては、新庄・最上地域には、エンベデッド関連企業がほとんど存在せず、地域の住民のエンベデッド技術者に関する関心がほとんど高まらなかったこと。地域の求職者の大多数が地元就職希望者であるのに対し、本校は、新庄市、山形市、仙台市等の地元ないしは地元近隣地域への求職者の就職指向に十分に応えることができなかったことが挙げられる。

本事業の目的は、こうした昨年度の実績と反省から、エンベデッドソフトウェアのみならず、エンタープライズ系ソフトウェアの開発にも対応できるITソフトウェア技術者養成プログラムを開発・実施するとともに、最上地域、山形市、仙台市等の情報産業会社およびハローワークとの連携の下に、若者の心のケアに配慮しながら、ニートおよび若年中途退職者の地元ないしは地元近隣地域(更には首都圏)への就職を強力に支援すること

(2) 事業の重点事項

本事業における重点事項は、ITソフトウェア技術者育成プログラムの開発・実施と若者の再就職支援プログラムの開発・実施である。

a. ITソフトウェア技術者育成プログラムの開発・実施

ITソフトウェア技術者育成プログラムは、トライ・アンド・エラーの中で楽しくソフトウェア開発を学べる育成プログラムにする点で、前年度のエンベデッドソフトウェア技術者育成プログラムの成果を取り入れるとともに、エンタープライズ系ソフトウェア開発にも通用する汎用性のある基本的ソフトウェア開発手法(プロジェクト管理等)を習得させることを内容とする。

ITソフトウェアの分析・設計には、UMLを使用し、プログラミング言語としては、ROBOLABおよびC言語を使用する。さらに、ITソフトウェア技術者としての資格取得のために基本情報技術者試験対策も実施する。

また、本育成プログラムにおいては、IT企業の即戦力を養成するために、1カ月間の企業実習(株)東北情報センター等)を導入し、受講者にITソフトウェア技術者としての実践を体験させる。この企業実習は、昨年度事業にあっては、十分に行えなかった点であり、本育成プログラムにおける重点事項の一つとする。

b. 若者の再就職支援プログラムの開発・実施

昨年度事業の実績・反省から、養成講座受講者の不安や悩みを少しでも軽減するために、本事業実施委員会・各講師・キャリアカウンセラー・産業カウンセラー・臨床心理士・受講者間のコミュニケーションを密にするために、実施委員会の権限を強化して、実施委員会就職指導担当委員が、適宜に積極的に受講者と面談を行い、各講師、キャリアカウンセラー、産業カウンセラー、臨床心理士との連絡調整にあたるものとする。

本年度の若者の再就職支援プログラムにおいては、上記のような強化された支援組織の下に、求人情報の収集方法、ビジネス・マナー、コミュニケーション能力に関する教育を行うとともに、キャリアカウンセリングおよび、IT会社・人材派遣会社人事担当者の面談等を通じて、適職への再就職をサポートする。

(3) 重点事項の達成状況

a. ITソフトウェア技術者育成プログラムの開発・実施の達成状況

今年度事業においては、ETロボコンを利用してのプログラミングの学習と併行して、基本情報技術者試験対策を組み込んだITソフトウェア技術者育成プログラム(総訓練時間、300時間)を開発することができた。エンベデッド系ソフトウェア開発にも、エンタープライズ系ソフトウェア開発にも通用する汎用性のある基本的ソフトウェア開発手法を受講者に習得させるのに好適な育成プログラムが完成したものと満足している。加えて、企業実習プログラムは、協力企業の協力を得て、各IT会社の企業風土を経験させるとともに、会社勤務に耐えうる精神的耐久力をつけさせること(社内清掃なども含む)を基本方針として作成することができた。プログラム開発の評価としては、95点としたい。

今年度のITソフトウェア技術者育成プログラムは概ね、順調に実施されたと評価できるが、養成講座におけるコンピュータ概論(48時間)については、概論の性質上、学習範囲が広範にわたるため、実施上、重点集中授業などの工夫が今一步であったと反省している。また、受講者の中に、講座時間外に生活上、アルバイトをせざるをえない者(2名)も存在し、受講者を講座に全力集中させる態勢をつくるのに苦労することになった。加えて、企業実習中に、就職活動を行わなければならない、「欠勤」、「早退」等を余儀なくされた受講者もあり、企業実習受け入れ側の会社としても、就職活動を優先させざるをえないことがあった。総じて、プログラム実施の評価は90点としたい。

b. 若者の再就職支援プログラムの開発・実施の達成状況

本事業における若者の再就職支援プログラムの中で、最も重要な位置を占めるのは、心の悩みのためのカウンセリングである。本校は、カウンセリングの組織づくりに特に意を用いたが、その概要を言えば、次の通りである。すなわち、第一に、昨年度事業の実績から明らかとなった課題として、カウンセラー、コンピュータ指導講師、実施委員会スタッフの三者が必ずしも受講者に関する重要な情報を共有していない点があった。本年度事業にあっては、実施委員会スタッフがコントロールタワーとなり、三者間の意思疎通をはかって対策を見つけていく態勢を構築した。第二に、各受講者に対するカウンセリングについては、就職の悩みと心の悩みの両面から考えていく必要があり、本講座にあっては、就職支援担当カウンセラー(キャリアカウンセラーが担当)と心の悩み担当カウンセラー(産業キャリアカウンセラーが担当)を各1名、配置することとした。加えて、心の悩み担当カウンセラーは、カウンセリング結果について臨床心理士に報告し判断を仰ぐ、という態勢をつくった。

カウンセリングの基本方針は、次の通りである。すなわち、第一に、今般の世界的な大不況に直面して、雇用情勢の深刻な悪化が現実のものとなりつつあるけれども、いたずらに危機感をあおることを避け、むしろ学習面での達成感をもたせることに力を注ぐ。第二に、昨年度の養成講座受講者の多くは、「学校が必ず就職を世話してくれる」という固定観念をもっていたようであるが、本年度の養成講座においては、自分から動かなければ就職への道は開けない、という精神を徹底させ、受講者の心の不安を取り除きながら、就職支援をしていく。第三に、受講者の精神的状況の変化については、微妙な兆候であっても注視する。第四に、昨年度は、コンピュータの学習終了後に再就職支援講座を実施した。しかし、受講者たちは、「本当に就職ができるのか」という大きな不安の中で学習するという状況の下に置かれた。こうした反省から、今年度事業においては、コンピュータの学習と併行して適宜に、カウンセリングを含む再就職支援講座を実施することとした。

受講者のプライバシーに深く関わる関係上、各受講者のカウンセリングの状況および内容について具体的に述べることは差し控えるが、カウンセリング実施の結果、明らかとなった受講者たちの希望や悩みなど(公表可能なものに限る)について列挙すれば、以下の通りである。すなわち、

ア. 仙台地区へ就職したい(1名)。地元ないしは県内に就職したい(1名)。

イ. ぜひともIT関連の仕事がしたい(4名)。

ウ. 職歴が全くないか、あるいはきわめて少ないことが悩み(2名)。

エ. 生活のために、本養成講座中においてもアルバイトをすることを余儀なくされている(2名)。

オ. 当初は、先が全く見えない状況だったが、今は、再就職支援の授業などを受けて、求職活動の仕方が分かって、気持ちの整理が大分できてきた(1名)。

カ. 2月に入って、焦りが出て不安を感じる(1名)。

キ. 自分一人だけが早期に就職の内定をもらい、他の受講者に気を遣う(1名)。

ク. 本校で開催された会社説明会に参加した県内IT企業の二次面接を受けたが、合否発表待ちで落ち着かない(3名)。

ケ. 経済不況をなんとかしてほしい(3名)。

上記のように、受講者が相当忌憚なくカウンセラーに悩みをぶつけることができるカウンセリング体制をつくることができ、この体制が実際によく機能したことが検証できる。この点での若者の再就職支援プログラムの開発ならびに実施についての目標達成度は、ともに90点と評価したい。

また、若者の再就職支援プログラムのもう一つの柱である求職スキル向上のためのプログラム(キャリア形成、履歴書・職務経歴書の書き方、社会人マナー、面接受け方等を内容とする)については、昨年度の実績を踏まえて、きわめて綿密かつ周到なプログラムが開発され、実施されたと評価している。この点の目標達成度は、100点としたい。

事業により得られた成果

(1) ITソフトウェア技術者育成プログラムについて

受講者たちの感想から明らかとなった本育成プログラムの主な成果を概括すれば、次の通りである。すなわち、

ア. E.Tロボットを使ったカリキュラム構成は、プログラミングの学習を楽しく飽きないものとすると同時に、モノ創りの一端を味わえることができた。

イ. トライ・アンド・エラーにより、プログラムのミスを探し、修正を加えながらデマンド通りにロボットが動いたときの達成感を体験させることができた。

ウ. 受講者間での教え合いを通じて、チームプログラミングの一端を体験させることができた。

エ. C言語の学習を通じて、プログラムの流れや構成を学ぶ機会を与えることができた。

オ. プログラミングの学習と併行して、基本情報技術者試験対策のための学習を行うことによって、資格試験にチャレンジする土台ができた。なお、現在、3名の受講者が、4月に行われる基本情報技術者試験を受験すべく、出願中である。

カ. 企業実習によって、受講者たちは、IT業界における仕事の内容に触れることにより、IT業界に対する誤った理解を修正し、視野を広げることができた。

(2) 若者の再就職支援プログラムについて

a. 心の悩みと就職の悩みについてのカウンセリング

前述のようなカウンセリング体制の整備と早期からのカウンセリング実施によって、以下のような成果が得られた。すなわち、

ア. カウンセラーと受講者間の信頼関係が深まり、受講者がカウンセラーに忌憚なく悩みが言えるようになり、相当プライベートなことなどもカウンセラーに告白し、悩みを聞いてもらう関係が築かれたものと思う。

イ. コンピュータ教師、カウンセラー、実施委員会スタッフの三者が、各受講者に関する情報を共有し、それぞれの立場からの指導・助言を行う際の参考資料とすることができた。

ウ. 本年度事業にあっても、受講者たちの中に、「学校が就職を世話してくれる」という先入観を持つ者があったが、カウンセラーによる指導によって、早期にそうした誤解を払拭することができた。

エ. 本養成講座にあっては、深刻な心の悩みに陥る受講者は皆無であった。カウンセラーの尽力により、自信をもって就職に立ち向かう積極的態度が受講者全体に備わってきた。

b. 就職スキル向上のプログラムについて

受講者たちの感想ならびにカウンセラーの所見から明らかなことは、就職スキル向上のプログラム実施によって、一般常識、履歴書・職務経歴書・送り状の書き方、就職活動の方法、面接の受け方などを学習することによって、「誰かが就職を世話してくれる」という待ちの気持ちではなく、自信をもって積極的に企業側に自己アピールしようとする姿勢が見えるようになった。

(3) 受講者の就職および就職活動について

受講者6名の平成21年2月20日現在における就職および就職活動の状況は、次の通りである。すなわち、

- ・管内IT企業 1名内定
- ・管内企業 2名出願中
- ・県内IT企業 1名一次・二次面接合格 最終選考へ
- ・県内IT企業 1名一次面接合格・二次面接へ
- ・仙台企業 1名出願中

受講者6名の応募先企業のほとんどは、IT企業であるが、管内の畜産企業や仙台市のスポーツ用品販売会社を志望する者もいる。受講者の就職のターゲットが、IT企業からIT技術を必要とする部門を持つ会社へと拡大しつつある。

(4) 受講者の満足度について

実証講座受講後のアンケート調査から、受講者の満足度については、5段階評価で5の大変満足が4名、4のやや満足が2名である。

今後の活用

本年度事業の今後の活用については、次の三点から考えることができるが、これは同時に、次年度以降の展開にも通じることである。

(1) ジョブ・カード制度への支援・協力

本養成講座においては、教育プログラム中にジョブ・カードの活用方法に関する学習がなく、受講者に対しジョブ・カードの活用を積極的に推奨する機会がなかったけれども、本養成講座は、いわゆる「実践型教育プログラム」の要件を完全に満たしている。今後、同様な養成講座を開講する場合は、地域のキャリアカウンセラーとの協働の下にジョブ・カード制度を活用して、若年中途退職者の再就職支援に寄与していく方針である。

(2) IT企業の新入社員研修プログラムへの利用

平成19年度のエンベデッドソフトウェア技術者養成講座および本年度の短期IT技術者養成講座は、県内でも徐々に知られるようになってきており、最近、県内のIT企業から、本養成講座のカリキュラムを新入社員研修プログラムとして利用したいという声があがっている。特に、メンタル・ケアを重視する本講座の特色は、東京の大手IT企業による高い評価を受けている。現在、大規模なIT企業においては、新入社員を対象としたアソシエイト制(先輩社員が新入社員の悩みを聞いたり、新入社員同士でピア・カウンセリングを開いて悩みを訴え合う制度)を導入していることが多い。本講座は、こうした傾向と軌を一にするものと言えよう。

(3) 専門学校生に対する就職支援

本養成講座によって得られたノウハウは、専門学校教職員による就職指導、カウンセリングの熟練度を高めるために利用可能である。特に、今般の未曾有の経済不況の中で、専門学校生が今後、当面するであろう就職難は想像に難くない。本講座の内容は、いまだ改善すべき点は数多いけれども、教育カリキュラムを更に整備して、専門学校(少なくとも情報系の専門学校)の学生に対する就職支援のためのプログラムとしてモデル化することを一つの目標としたい。

次年度以降における課題・展開

(1) 受講者募集について

今年度は、各戸回覧による募集方法を取り入れたが、定員10名に届かず、6名の応募に終わった。ただ、前年度事業(「ETロボットを活用したエンベデッドソフトウェア技術者育成プログラム開発事業」)の実施以来、本校によるIT技術者養成の実績が地域に認知されるようになってきており、地域における若年中途退職者の応募も今後、増加していくものと思われる。

(2) ITソフトウェア技術者育成プログラムについて

第一に、ROBORAB基礎・応用の学習については、演習の際、教師が特定の受講者に集中してサポートすることが多くなり、進度の速い受講者がたびたび手持ち無沙汰になってしまう場面もあった。進度の速い受講者に対しては、特別な課題を準備すべきものと思う。

第二に、コンピュータ概論の学習については、コンピュータ概論の内容が広範囲で抽象的な部分があり、テキストの内容を一通りカバーするために日程を延長せざるをえなかった。コンピュータ概論の指導にあたっては、現時点での受講者の実力を見極めた上で、重点的な学習項目を設定すべきであった。

第三に、C言語の学習については、他のプログラム言語と大差がない四則演算や基本的な分岐・繰り返し処理に関しては、問題はないが、C言語特有のポインタや関数の分野の指導には大きな困難が伴った。メモリと関連付けながら、繰り返しアドレスとポインタについて指導すべきであった。

第四に、UML-C実践学習については、各工程で作成した設計書・プログラム・テスト項目に関してレビューして、各受講者がいかなるデマンドの下でモノを作ったのかを発表する場を設けることができたのは評価できるが、仕様変更のために割り当てた時間数が多すぎた。

第五に、プログラミングの学習と併行して、基本情報技術者試験対策のための学習を取り入れることによって、IT教育上、きわめて大きな成果を得ただけけれども、当試験を受ける者と受けない者との間に、学習のモチベーションに大きな差が出てしまったようである。今後、基本情報技術者試験の受験を受講要件とすることについて検討する余地がある。

第六に、本養成講座開始前に実施委員会において、本講座中のアルバイトを自粛することを受講条件に追加すべきか否か、について検討されたが、自立心があるからこそアルバイトをする(例えば、自分の小遣いや保険料は自分で稼ぐ)という面も重視して、受講中のアルバイトについては、各受講者の良識に任せることとした。しかしながら、アルバイトのため体調を崩したり、遅刻したりする受講者もあり、より厳重な生活指導の必要性を感じた。

(3) 若者の再就職支援プログラムについて

第一に、心の悩みおよび就職の悩みに関するカウンセリングについては、前述のようなカウンセリング体制が、予想以上にうまく機能し、本年度事業にあっては、深刻な悩みを訴えたり、心的異常の兆候のある受講者は存在しなかった。カウンセラーと各受講者間の信頼関係が醸成され、不安が大きくなる前に、専門のカウンセラーたちが適宜に適切な助言、情報提供を行なったためと評価される。ただ、これから、4月に入っても就職が決定しないときは、受講者たちに大きな不安が生じることが予想されるので、本講座終了後も、フォローアップする必要がある。

第二に、就職活動の進め方に関する学習については、指導講師が一方向的に話を進める印象を受講者に与えたようであり、一層、受講者とコミュニケーションをとりつつ授業を進める必要を感じている。

第三に、面接の受け方に関する学習については、模擬面接を通じて、言葉遣いや細かな動作など、受講者自身では気づかない問題点を発見させるような指導は十分、評価されるけれども、面接に対する受講者の不安がきわめて大きいので、模擬面接の回数をさらに多くすることを検討しなければならない。

(4) 企業実習について

1ヶ月(15日間)の企業実習だったため、受入れ先企業でも、受講者の担当する業務内容に工夫をしていたが、一部の受講者から、もっとプログラム開発的な内容が欲しいという声があがった。しかしながら、IT企業は、個人情報保護法の下に部外者への個人情報の漏出の防止に細心の注意を払うとともに、企業秘密の保持にも多大の努力をしている。このような観点から見ると、上記のような受講者の不満に対しては、事前における関連法制(個人情報保護法、著作権法、特許法、刑法等)に関する十分な指導が必要となるであろう。

(5)就職率アップのための努力

昨年9月に起きた世界的金融危機以来、わが国の実体経済は急速に後退しつつある。今や、ほとんどあらゆる分野の大手企業において、派遣社員の派遣止め、契約社員についての契約更新拒否、更にはまた正規雇用従業員に対する解雇・早期退職者募集が行なわれ、若年中途退職者の再就職は、ますます厳しい環境の下に置かれている。しかしながら、我が国の雇用情勢に明るい部分が全くないわけではない。最近(今年2月)、東北地域(仙台市)において、大企業が採用を控える中、これまで人材確保に悩んできた東北の中小企業約100社が、人材発掘の好機と見て、採用活動を活発化させている(朝日新聞山形県版・平・21・2・25付)。本校としても、若年中途退職者の再就職支援のために、山形県内あるいは宮城県内の中小のIT企業の求人を探り起こしていく必要があると感じている。本校は、地元8市町村の全額出資の公設民営の第三セクターとして設立され、創立以来21年間にわたる教育事業を通じて、地元および県内の企業や自治体との太いパイプをつくってきた。こうしたパイプをフルに活用して、きめ細かな求人情報の収集に力を入れていく方針である。

3. 事業の実施に関する項目

履修証明書等

「若者の心のケアに重点を置いたITソフトウェア技術者育成プログラム」に基づき、実証講座「短期IT技術者養成講座」(総時間数462時間)を実施し、修了生6名に対して、修了証書を発行した。

カリキュラムの内容

- (1)「若者の心のケアに重点を置いたITソフトウェア技術者育成プログラム」のカリキュラム
以下の4つのカリキュラムからなる。

ITソフトウェア技術者育成プログラム(総訓練時間 300時間)

トライ・アンド・エラーの中で楽しくソフトウェア開発を学べる育成プログラムにする点で、前年度のエンベデッドソフトウェア技術者育成プログラムの成果を取り入れるとともに、エンタープライズ系ソフトウェア開発にも通用する汎用性のある基本的ソフトウェア開発手法(プロジェクト管理等)を習得させることを内容とする。訓練内容は、オリエンテーション(2時間)、ITソフトウェア技術者概要(4時間)、ROBOLAB基礎編(12時間)、ROBOLAB応用編(18時間)、コンピュータ概論(48時間)、C言語学習(90時間)、UML-C実践学習(78時間)、基本情報技術者試験対策(42時間)、プレゼンテーション実習(6時間)の9項目で編成されている。

企業実習(総訓練時間 90時間)

IT企業の即戦力を養成するために、1カ月間の企業実習(株東北情報センターおよび株エッサム)を導入し、受講者にITソフトウェア技術者としての実践を体験させる。

若者の再就職支援プログラム(総訓練時間 72時間)

基本的な求職活動の仕方、キャリアコンサルタントによるキャリアカウンセリング、人事担当者との面談、会社説明会等を通じて、適職への再就職を強力にサポートする。

訓練内容は、就職活動の進め方(6時間)、職場理解と職場体験(6時間)、キャリア形成の必要性(6時間)、履歴書の書き方・職務経歴書の書き方(6時間)、社会人マナーについて(6時間)、社会保険のしくみ(6時間)、面接の受け方(6時間)、キャリアカウンセリング(12時間)、会社説明会と人事担当者との面談(18時間)の9項目で編成されている。

カウンセリング(月1回延べ5回)

各受講者に対するカウンセリング体制を確立し、心の悩み担当カウンセラーによるカウンセリングを月1回実施する。加えて、心の悩み担当カウンセラーは、カウンセリング結果について臨床心理士に報告し、判断を仰ぐという態勢をとって、受講者をフォローする。

講座の実施

- (1)実証講座「短期IT技術者養成講座」の実施

実証講座名

「短期IT技術者養成講座」

期 間

平成20年10月1日から平成21年2月19日まで(82日間)

受講者の募集方法

- ・最上8市町村各戸回覧
- ・最上8市町村広報掲載
- ・ハローワーク募集協力(新庄・酒田・鶴岡・村山・山形)
- ・山形県若者就職支援センター募集協力(最上、庄内、山形)
- ・新聞折込チラシ(最北地区 市内13,550枚 郡部11,800枚)2回
- ・新聞スポット広告(山形新聞)
- ・新聞記事掲載(山形新聞)

受講者の応募状況

- ・応募者数 6名
- ・応募書類提出者 6名(履歴書・職務経歴書)
- ・選考試験受験者 6名(適性試験・面接試験)
- ・最終受講者数 6名
- ・受講者 6名(男6名)
- ・平均年齢 25.0歳
- ・年齢別 20～24歳 3名 25～30歳 3名
- ・出身地別 新庄市2名、真室川町1名、最上町1名、鮭川村1名、大蔵村1名

修了証書授与式・特別講演会・成果発表会

- ・日 時 平成21年2月20日(金)13:30～15:40
- ・場 所 最上ニューメディアセンター研修室

プログラム

第一部 修了証書授与式 13:30～13:50

- 1)修了証書授与
- 2)校長よりねぎらいの言葉

第二部 特別講演 14:00～14:50

講演テーマ:「企業が求めるIT人材」

講師:(株)コア 人材開発部 溝淵 達雄 氏

第三部 成果発表会 15:00～

- 1)事業概要 15:00～15:10
- 2)事業成果発表 15:10～15:30
受講者による成果発表1 受講者A、B、C
受講者による成果発表2 受講者D、E、F
- 3)質疑・総評 15:30～15:40

総評:学校法人最上広域コア学園理事長 村上 國雄実施委員長

実証講座の特徴

・ITソフトウェア技術の導入部分にロボットを使って、視覚的にわかりやすくIT技術を学ぶ学習法を取り入れた。

・(株)東北情報センターの協力の下、受講者は、社員同様、入社・退社時間を記録した。同社は、プライバシーマークを取得しており、部外者による会社の入退出や各種ドキュメントやプログラム等の社外持ち出しを禁止しており、受講者もセキュリティに関して厳重な管理の下で受講を行なった。また、各授業終了後、同社の業務日報にならって、各人が受講日報を記録し、講師が点検を行なった。

・専門家のカウンセラーにより、月1回受講者一人ひとりについてカウンセリングを行なった。このことにより、若者の心の不安や誤解、思い込みを少しでも軽減し、再就職へ向けたモチベーションを高める工夫を行なった。

・カリキュラムの中で、ITソフトウェア技術者の登竜門である国家資格取得のための基本情報技術者試験対策講座を実施した。

・IT企業の即戦力を養成するために、1カ月間の企業実習(株)東北情報センターおよび(株)エッサムを導入し、受講者にITソフトウェア技術者としての実践を体験させた。

支援対象者(受講者)の状況

・実証講座「短期IT技術者養成講座」を受講した6名の受講者全員が実証講座を修了し、6名全員が修了証書を手にした。一人の脱落者もなく講座を修了できたことは、大変良かった。

・受講者6名の平成21年2月20日現在における就職および就職活動の状況は、次の通りである。すなわち、

- ・管内IT企業 1名内定
- ・管内企業 2名出願中
- ・県内IT企業 1名一次・二次面接合格 最終選考へ
- ・県内IT企業 1名一次面接合格・二次面接へ
- ・仙台企業 1名出願中

受講者6名の応募先企業のごほとんどは、IT企業であるが、管内の畜産企業や仙台市のスポーツ用品販売会社を志望する者もある。受講者の就職のターゲットが、IT企業からIT技術を必要とする部門を持つ会社へと拡大しつつある。